

令和8年度

前期

入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験問題は指示があるまで開かないでください。
2. 解答は必ず解答用紙に記入してください。
3. 字数制限のある問題は、句読点や符号も解答の字数に含みます。
4. 問題冊子・解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。

受験番号	氏	
	名	

近畿大学附属広島中学校東広島校



問題は次のページから始まります。

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 万国ばんこくハクラン会に出かける。
- ② 自動車をアメリカにユシユツする。
- ③ 作戦がウラメに出る。
- ④ 試合のショウハイが決まる。
- ⑤ アツあつさ寒ひがんさも彼岸まで。
- ⑥ 枚拳まいけんにいとまがない。
- ⑦ 彼はいつも自分の都合かあひばかり優先する。
- ⑧ 猫ねこの額ぬかのような広さの畑。

問二 次の表現の空欄  にあてはまる漢字一字を、それぞれ答えなさい。

①  心伝心（言葉を使わなくても、お互いの気持ちが通じ合うこと。）

② 肩で  を切る（得意そうに、いばって歩くこと。）

問三 次のことわざとほぼ同じ意味を持つものを、後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

転ばぬ先の杖

ア 目から鱗が落ちる      イ 石橋を叩いて渡る      ウ 火に油を注ぐ      エ 溺れる者は藁をもつかむ

問四 次の四字熟語の意味として最も適当なものを、後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

異口同音

ア 意見が一致すること。

イ 一人の意見に従うこと。

ウ 意見が食い違うこと。

エ 意見がたくさん出ること。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間の場合、「言葉」は意味を伝えるだけでなく、モノの見え方を変えてしまうことがある。たとえば、心霊写真。「ここに顔があるよ」とか「ほら、ここに手が写っている」と言われると、実際は幽霊なんか写ってなくても、あたかもそのように見えてしまうことがあるだろう。

この時、僕たちの頭の中で起きているのは、言葉による見間違いだ。「顔」や「手」という言葉から、その視覚的なイメージを頭に思い描き、それを写真に当てはめて、木目や石ころなど、普段はそう見えないモノを幽霊と見間違えてしまうのだ。

もし、シジウカラの「ジャージャー」が「ヘビ」を意味する「言葉」になっているのであれば、それを聞いたシジウカラは、ヘビをイメージしているはずだ。そして、もしそうであれば、普段はヘビに見えないモノをヘビと見間違えたりしないだろうか。

そこで、この木の枝だ。木の枝であればそこら中に転がっているので、普段、シジウカラにとっては気にする物ではないだろう。しかし、「ジャージャー」と聞かせてみたらどうだろう。ヘビと見間違えるかもしれない。木の枝に紐を付け、それでちよこつと動かしてみたら、なおさら見間違えてくれそうだ。

僕はスピーカーと黒い紐、そして一本の木の枝を持って森へと向かった。言葉を証明するための「見間違い実験」の始まりだ。

森に着くと、さっそくシジウカラのつがいを見つけた。まず、このつがいに実験してみよう。僕は、木の枝の先端に黒い紐を結びつけた。そして、その紐をまっすぐ立った木の幹の枝分かれした箇所かしよに引っ掛けた。これで、紐を引っ張れば、枝を木の幹の下から上へと這わせることができるはずだ。

普通に見たら木の幹に沿って動くただの枝にすぎないが、「ジャージャー」を聞かせながら見せてみたら、ヘビと見間違えるのではないだろうか。スピーカーを枝から三メートルほど離れた木にセットして、さっそく実験開始である。

「ジャージャー、ジャージャー……」と声を流すと、すぐにシジュウカラのつがいがスピーカーに近づいてきた。ちょうど枝が見える位置に来たところで、今度は紐を引っ張り、木の枝を幹に沿ってゆつくりと引き上げた。

すると、二羽のシジュウカラはすぐに枝の方に近づいてきたのである！<sup>①</sup>まるで正体を確かめるかのように、枝を見ているのではないか。まさに、思った通りの行動だ！

僕は自分が怖くなつた。毎日シジュウカラを見ていたせいか、<sup>W</sup>“こういう実験をしたらこう動く”というのを、かなりの高精度で予想できるようになっていたのだ。しかも、今回は見間違いを利用した新しい実験。誰もやったことがない世界初の試みである。もちろんシジュウカラにとっても「ジャージャー」を聞きながら這う枝を見るなんて初めての体験だろう。それにもかかわらず、僕はシジュウカラの反応を正確に予想できた。もはや前世はシジュウカラなのではないかという疑いまで出てくるほどだ。

それと同時に頭に浮かんだのは、<sup>X</sup>大・発・見の三文字だった。「ジャージャー」を聞いたシジュウカラは、頭の中でヘビの姿をイメージしているはずである。そして、そのイメージをたよりに視界の中からヘビを探したから、木の枝をヘビと見間違え、<sup>かくにん</sup>確認したに違いない。A、「ジャージャー」は「ヘビ」を意味する言葉になつて

いるはずだ！

一分ほどすると、ヘビではないと気づいたのか、二羽のシジュウカラは枝から離れて別の場所に飛んでいった。双眼鏡で追うと、近くの茂みや地面をくまなく探している。どこに本物のヘビが潜んでいるのか、探索しているように見えた。

シジュウカラにとって、「ジャージャー」と聞こえてきたら、まずどこにヘビがいるのかを確認することが重要だ。

シジュウカラの天敵であるアオダイショウは地面や木の幹に隠<sup>いん</sup>ぺい的な色をしていて、決して目立つものではない。どこに居るのかを確認した上で、追<sup>お</sup>い払<sup>はら</sup>うべきか、距離<sup>きょり</sup>を置くべきか、対策を考えるのが妥当<sup>だとう</sup>である。だから、木の枝に近づいたのだ。

この発見を論文にするにはどうしたら良いだろうか。②どんな反論にも耐<sup>た</sup>えうる、非の打ち所のない実験計画を練らなくてはならない。僕は、考えうる反論を自分自身で考案し、一つひとつ検証していくことにした。

たとえば、どんな鳴き声を聞いたかに関係なく、シジュウカラは這う枝を見たら近づく可能性がある。その場合、「ジャージャー」が特別にへびをイメージさせる声だとはいえないだろう。

そこで僕はへび以外の天敵を追い払う際に出すシジュウカラの声（ピーツピ・チチチ）や仲間をただ集めるために出す声（チチチ）を聞かせながら、幹を這い上がる枝を見せてみた。

すると、いずれの鳴き声を聞かせた場合も、シジュウカラは幹を這わせた木の枝に近づくことはなかった。三メートルという近距離で、目の前で同じように枝を動かしているにもかかわらず、まったく気にしないのだ。

シジュウカラは「ジャージャー」を聞いた時にだけ動く枝を確認し、他の声を聞かせた場合は同じ枝でも無視をする。この結果はまさに「ジャージャー」が「へび」を意味する言葉になっていて、聞き手のシジュウカラにへびのイメージを思い起こさせたことを示している。

**B**、まだ検証しなくてはならないことがある。たとえば、とても疑い深い人はこう言うだろう。「ジャージャー」は聞き手のシジュウカラにへびのイメージを想起させるものではなく、単に「好奇心<sup>こうきしん</sup>」を高める作用を持っている。そして、「ジャージャー」を聞いて好奇心の高まった状態のシジュウカラは、へんな動きをする木の枝に近づいていったただだと。

そこで僕は、同じ枝を別の動きで動かして見せてみることにした。今度はへびにはまったく似ていない、左右に大き

く揺らす動きだ。もし好奇心によるものならば、「ジャージャー」を聞いた時、この枝の動きにも近づいてしまっただろう。

さつそく実験してみると、こちら結果は思った通り。「ジャージャー」を聞かせてみても、他の声を聞かせてみても、左右に揺れる木の枝にはシジュウカラは「近づかなかった」のである。つまり、枝の動きがへびに似ている時にだけ、「ジャージャー」を聞くと近づくのだ。これは、単なる好奇心の高まりでは説明できない。シジュウカラは「ジャージャー」という鳴き声を聞くと、視界からへびに似たものを探し出し、確認しに行っているに違いない。つまり、へびの姿をイメージしているということだ。

最後にもう一つ実験を加えた。シジュウカラの天敵のアオダイショウは、木の幹を這い上がるだけでなく、当然のことながら、地面も這う。だから、地面の上で木の枝を這わせる実験も試してみた。

こちら結果は予想通り。「ジャージャー」を聞かせた時だけ、地面を這う枝に接近し、確認することがわかったのだ。

実験計画は固まった。あとはたくさんさんのシジュウカラの協力を得て、遂行するのみである。この研究が完成すれば、ついに二千年以上信じられていた「人間のみが言葉を持つ」という常識を覆すことにつながるはずだ。何年かかっても構わない。僕の人生をこの実験に捧げよう！

それから僕は何度も何度も、鳴き声で鳥たちを集めて、枝を動かし見せていった。実験をしたのは五月。すでにアオダイショウが冬眠から目覚めていて、シジュウカラはつがいになっている季節である。六月になるとシジュウカラの親鳥は子育てに慌ただしくなるし、そのうちヒナも巣立つてくるので条件を統一できない。なので、この実験ができる時期は毎年一か月ほどしかないのだ。もちろん一年では終わらないので、毎年五月になるとこの実験をするようになっていた。

実験をしていてわかったのだが、シジュウカラを騙せるのは一羽につき一度きり。いったん枝だとバレてしまうと、もう一度騙そうと思つてもうまくいかなのである。人間の場合も「ほら、ここに顔がある！」などと言われると、初めは写真を心靈写真と見間違えることがあるが、もしそれが木の影など幽霊でないものだと思つれば、その後、騙されることはないだろう。<sup>③</sup>シジュウカラの場合もそれと同様なのだ。そんなこともあり、実験は一羽につき一度きりとした。これは、研究当初にたくさんさんのシジュウカラに色足環<sup>②</sup>をつけ、個体を識別できるようにしていたからできたことだ。そして二〇一七年五月、ようやく僕はすべての実験を終えた。気がつく、実験を始めてから四年の月日が流れていた。結果はともクリアなものだった。八十四羽のシジュウカラからデータを得たが、本当に予想通りの結果が得られた。

ここまできて、ようやくシジュウカラの鳴き声にも「言葉」があると証明できた。「ジャージャー」という声を聞いたシジュウカラは、頭にヘビのイメージを思い描き、それを用いて視界の中からヘビのようなものを探す。だから、ヘビのような動きをする枝を、ヘビと見間違えて確認してしまうのだ。つまり、「ジャージャー」はヘビを示す「名詞」のようなものだといえる。

(鈴木俊貴『僕には鳥の言葉がわかる』による)

(注) シジュウカラ——シジュウカラ科の小鳥。

つがい——動物の雄と雌の一組み。

アオダイショウ——ナミヘビ科のヘビ。

色足環——鳥の足につける、識別のための環。



問三 —— 線部② 「どんな反論にも耐えうる、非の打ち所のない実験計画」とありますが、この実験内容として適當

なものを、次のア〜オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア シジュウカラに「ピーツピ・チヂチヂ」などの声を聞かせながら幹を這い上がる枝を見せても木の枝に全く反応しないことを確認し、細かな音の違いを聞き分けられるシジュウカラの能力を証明する。

イ 「ジャージャー」を聞いたシジュウカラが、ヘビとは異なる動きをする枝を見ても木の枝に近づかないことを確認し、「ジャージャー」が単にシジュウカラの好奇心を高めるものではないことを証明する。

ウ シジュウカラに「ジャージャー」に加えて「チヂチヂ」や「ピーツピ・チヂチヂ」を聞かせても仲間を逃がそうとしていることを確認し、これらの鳴き声がヘビを含めた天敵を意味するものであることを証明する。

エ 「ジャージャー」を聞いたシジュウカラが、這う枝を見ると近くの茂みや地面をくまなく探していることを確認し、シジュウカラの探索能力の高さと仲間を守ろうとする習性を持つことを証明する。

オ シジュウカラに「チヂチヂ」などの声を聞かせながら幹を這い上がる枝を見せても木の枝に近づかないことを確認し、「ジャージャー」だけがヘビをイメージさせる音だということを証明する。



問五 次の【資料】は、本文で行われた実験に関する対談の一部です。これを読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

【資料】

鈴木 僕が考えたのが、見間違えを利用した認知実験です。

山極 見間違え？

鈴木 ええ。僕達人間には、シンボルをきっかけとして見間違えが起こることがありますよね。

いい例が心霊写真で、ただの  X でも「これ、人の顔じゃない？」と言われると、急に顔に見えてきて怖くなってしまふ。ホモ・サピエンスの顔のシンボルである「ヒトノカオ」という音が、視覚的なイメージを呼びおこすからですよ。

シジュウカラにも同じ現象が起こるならば、彼らは  Y をシンボルとして捉えていると言っている。そう考えて僕は、20 cmほどの木の枝を用意しました。

といてもただの枝です。ヘビに似ているわけじゃないので、通常ならシジュウカラがヘビに見間違えるわけはありません。

山極 心霊写真の例えでいう  X と同じですね。何も言われなければただの  X でしかない。

(山極寿一・鈴木俊貴『動物たちは何をしゃべっているのか?』による)

- (1) 【資料】の空欄  に共通してあてはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 顔                      イ 音                      ウ 影<sup>かげ</sup>                      エ 写真                      オ 幽霊<sup>ゆうれい</sup>

- (2) 【資料】の空欄  にあてはまる言葉を、本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問六 〓 線部①②の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 〓 線部①「僕は自分が怖こわくなった」という表現から、予想通りに計画は進んでいるが、世界初の実験をひとりで行わなければならないことに恐きょう怖ふしん心を抱いだいていることがわかる。

イ 〓 線部②「大・発・見」の三文字だった」という表現から、予想以上に周囲の反応が大きかったことに驚おどろき、自分の実験結果の素晴すばらしさに気持ちが高揚こうようしていることがわかる。

ウ 〓 線部③「僕の人生をこの実験に捧ささげよう！」という表現から、人間だけが言葉を持つという常識を覆くつがえすことが困難であるという現実げんじつに直面じつめんして、不安な思いにかられていることがわかる。

エ 〓 線部④「気がつくつと、実験を始めてから四年の月日が流れていた」という表現から、実験ができる期間や条件が限られているなかですべてをやり遂とげて、感概かんがいに浸ひたっていることがわかる。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日のこと、学校で先生が、生徒たちに向かって、

「あなたたちはどんなときに、いちばんお父さんや、お母さんをありがたいと思いましたか、そう感じたときのことをお話しください。」と、おっしゃいました。

みんなは、目をかがやかして、手をあげました。最初にさされたのは、竹内でありました。

「私が、病気でねていましたとき、お父さんは毎晩めしあがるお好きな酒もお飲みになりませんでした。そして、お母さんは、ご飯もあまりめしあがらず、夜もねむらずにまくらもとにすわって、氷まぐらの氷がなくなれば、とりかえたりしてくださいました。僕は、コツ、コツと氷の砕ける音くだをきいて、しみじみとありがたいと感じました。」と、答えました。

①先生は、これをきくと、おうなずきになりました。ほかの生徒たちも、みんなだまって、おとなしく聞いていました。そのつぎに、さされたのは、佐藤さとうでありました。佐藤が、立ちあがると、みんなは、どんなことをいうだろうかと、彼の顔を見守っていました。

「僕も、やはり竹内くんと同じのであります。いおうと思つたことを、竹内くんがみんな話してくれました。」

佐藤の答えは、ただそれだけでありました。先生は、こんど、小田をおさしになりました。彼は、組じゅうでの乱暴者ぶでした。そればかりでなく、家が貧乏びんぼうとみえて、いつも破れた服を着て、破れたくつをはいてきました。くつしたなごは、めつたにはいたことがないのです。みんなの視線は、たちまち、小田の顔の上に集まつたのはいうまでもありません。

彼は、立ち上がると、

「私のお母さんは、お金のないときは、自分のだいじなものも売って、僕のためにいろいろなものを買ってくださいます。そんなとき、私はじつにすまないと感じます。」といいました。すると、先生は、

「いろいろなものとは、どんなものですか。」と、おききになりました。小田は、その答えに困ったらしく、しばらく、うつ向いてだまっていました。やつと顔を上げると、

「僕の月謝や……また、どこかへ帽子ぼうしをなくしたときには、お母さんは、自分の着物を売って、買ってくださいました。」と、答えました。

③この言葉は、みんなに少なからず動揺どうよくをあたえました。なかには、また、くすくす笑うものさえありました。しかし、先生が、笑うものをおしかりなさったので、すぐに静かになったけれど、小田は、そのとき、みんなから、なんだか侮ぶ辱じやくされたような気がして、顔かほが赤くなりました。

そのとき、ひとり隣となりに並んで腰こしをかけている北川だけは、笑いもしなければ、じつとしてまゆひとつ動かさず、まじめにきいていました。小田は、心の中で、彼の態度をありがたく思ったのです。

小田のお父さんは、もう死んでしまって、ありませんでした。ひとりお母さんが、手内職をして、母子は、その日、その日、貧しい生活をつづけていました。

彼は、学校から帰ると、今日のお話をお母さんにしたのでした。その日あったことは、なんでも帰ってからお母さんに話すのが常でありました。これをきくと、お母さんは、

「あんまり、おまえが家のことを正直にいったものだから、みんなに笑われたのですよ。」と、目に涙なみだをためて、おっしゃいました。

「お母さんが、僕のために、自分の大事になさっているものもなくして、買ってくださいるのを、僕がありがたく思っているって、いけないのですか。」

「いえ、正直にいつて、すこしも悪いことはないんですけど……。」  
こういつて、お母さんは、また目をおふきになりました。

「だが、お母さん、笑ったやつもあつたけど、笑わないものだつてありましたよ。笑ったやつは、こんどなぐつてやるのだ。」と、小田が、いいました。

「そんなことをしてはいけません。おまえが、乱暴だから、みんなが、こんなときに笑うのです。どちらが正しいかわかる時がありますから、けつして、そんな乱暴をしてはいけません。」と、お母さんは、おいましめになりました。

小田は、考えていましたが、

「ねえ、お母さん、いつか、家へ遊びにきたことのある、北川くんなどは、だまつてきいていましたよ。」といいました。

「よくものわかる、おりこうなお子さんですね。」と、お母さんは、いつて、また、涙をおふきになりました。

それから、二、三日してからです。小田は、学校へゆく途中とちゆうで、あちらからきた、北川くんに出遇であいしました。彼は、今年から学校に上がったという、小さな弟といつしよでありました。

「おはよう。」

「いつしよにいつしよよ。」

たがいに、声をかけ合つて、三人が、並んで歩きました。そして、学校の門をはいったときであります。

「ひとりで、パンが買える？」と、北川くんが、立ち止まつて、やさしく弟の顔をのぞくようにして、きいていました。小さな弟は、だまつて、うなずきました。

「もし、お金を落としたら、兄さんのところへいつてくるのだよ。」と、北川くんは、いつていました。

兄弟を持たない小田は、この仲のいい二人のようすを見て、心からうらやまずにはいられなかつたのです。

「僕たち、お母さんが、かぜをひいてねているので、今日は、弁当を持ってこなかったんだ。」と、北川くんが、小田に向かって、話しました。

そのとき、小田は、また自分のお母さんのことを思わずにはいられませんでした。

「いまごろ、お母さんは、いっしょうけんめいで、お仕事をなさっているだろう……。」

そう思うと、お母さんの、お仕事をなさっている姿が、目にありありと浮かんできて、しぜんと熱い涙がわいてくるのでした。

その日、ちょうど、お昼の前の休み時間でありました。北川の弟さんが、しきりに兄さんをさがしているのを見つめましたから、小田は、大きな声で、

「北川くん！」と、呼んで、知らせたのです。

北川は、すぐに走ってきました。そして、弟のそばへいって、なにかいうのをきいていましたが、

「だから、気をつけるようにいったじゃないか。」という声がきこえたかと思うと、小さな弟は、しくしくと泣きだしました。

小田は、弟が、パンのお金を落としたのだなと悟りました。しかし、いったはずねるまもなく、

「泣かんだって、いいのだよ。」といって、北川が、自分の持っているお金をやって、弟の頭をなでると、弟は、泣くのをやめて、急に、元気づいて、あちらへ駆け出してゆきました。

「なんて、朗らかな兄弟だろう。」と、小田は、この有り様を見て、感心しました。

そのうちに、話す時間もなく、ベルが鳴ってお教室に入り、授業がはじまりました。

いよいよお昼になって、みんながお弁当を食べるときとなったのです。ひとり、北川だけは机に向かって、宿題をしていました。

小田には、なにかもわかっていました。自分が、パンを食べずに、弟にパンを買ってやったことも。この心があれ

ばこそ、このあいだも、自分の話をまじめにきいていてくれたのだと、小田は、思いました。

「これが、ほんとうの同情というものだ。」

そう小田は悟ると、自分の行為<sup>こうい</sup>までが顧<sup>かえり</sup>みられて、<sup>⑤</sup>これから、自分も、ほんとうの正しい、強い人間になろうと決心<sup>こころ</sup>したのでした。

（小川未明「笑わなかった少年」『定本小川未明童話全集10』による）

問一 —— 線部① 「先生は、これをきくと、おうなずきになりました」とありますが、どうしてうなずいたのですか。  
最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒から自分の期待する答えが出たことに満足したから。

イ 生徒が父親に対する感謝の気持ちを述べたことに共感したから。

ウ 生徒が母親の愛情について堂々と発表したことに感動したから。

エ 生徒から自分の予想を上回る答えが出たことに感心したから。

問二 —— 線部② 「彼は、<sup>かれ</sup>組じゅうでの乱暴者でした」とありますが、このことがわかる「小田」の発言を、本文中から二十字以内で抜き出し、はじめの六字を答えなさい。



問四 — 線部④ 「顔が赤くなりました」とありますが、ここでの「小田」の心情として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなに思いが伝わらないことへの焦り<sup>あせ</sup>。

イ みんなが自分を笑ったことへの怒り<sup>いか</sup>。

ウ 緊張<sup>きんちやう</sup>のあまり余計な発言をしたことに対する後悔<sup>こうかい</sup>。

エ ありのままの自分をさらけ出したことに対する恥ずかしさ<sup>は</sup>。



問六 本文中の登場人物について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「お母さん」に関する説明として適<sup>て</sup>当<sup>て</sup>で<sup>な</sup>い<sup>も</sup>の<sup>を</sup>、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親がいなくても息子が困ることのないよう精一杯働いている。

イ 乱暴な振る舞いを繰り返す息子に行動を改めるよう諭している。

ウ 息子に対する「北川くん」の態度を好ましく思っている。

エ 学校での出来事を何でも話す息子の自立心のなさに苛立っている。

(2) 「小田」に関する説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア お金を渡された「北川くん」の弟が感謝の言葉も述べずにその場を立ち去った様子を見て、自分のことしか考えない幼さにあきれかえっている。

イ 先生が家庭の事情にふみこんだ質問をしてきたことに納得できないうたが、笑った生徒たちに対して厳しく注意してくれたことはありがたく思っている。

ウ 「北川くん」と弟とのやりとりを見て愛情あふれる家族の姿をうらやましく思い、自分と母親との関係にも思いをはせて母親の深い愛情に改めて感謝している。

エ 自分の言動のせいで生徒たちから嫌われているが、「北川くん」の態度やお母さんの言葉によって、みんなに謝って許してもらおうと思いはじめている。



